彼女がいるってこういうことか

コッテリパチン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼女がいるってこういうことか

【Ｎコード】
Ｎ７０９８Ｓ

【作者名】
コッテリパチン

【あらすじ】
これからの学校生活も特になにごともなく普通に過ごし、将来も普通な人生を歩むだろうなと半ばあきらめ気味に日々を暮らしている普通な高校２年生アキヒコが、突然低身長パッツン前髪の彼女ができることによって、想像していた普通よりも、色がついた人生を送るお話。

告白

「……きです」

大半の生徒がすでに帰宅し、日直で帰りが一足遅れたアキヒコが駐輪場で自転車を跨がろうかとしたところだった。

「あ、あなたが好きです！」

日の暮れかけた駐輪場内に声は思いのほか響き渡った。人影がほとんどなくアキヒコと視界の端々に映る程度の生徒しかいないこの状況の中、その声はほぼ間違いなくアキヒコに向けられての言葉だった。

帰って何をしようかな、程度のことしか頭の中で考えていなかったアキヒコは、言葉の内容よりも、予想外の声量で声をかけらたことに驚き振り向いた。

「えっ」

振り向いた目の前には、低身長で、パッツンという擬音が聞こえてきそうなほど見事にそろった前髪の女の子が立っていた。

夕日のせいでそう見えているだけなのか、頬を少しばかり紅潮させこちらを見ている。

「あの……」

大股で2歩半近く離れているその少女は、目が合った瞬間、先ほどのはっきりした声とはだいぶ違ったかすかな声をもらしながら突然、モジモジとその場に立ちつくした。

すぐに状況を理解したアキヒコだったが、漫画やアニメ、映画の中でしか見たことのなかった出来事、今まで眺める対象というだけだった<告白>という出来事が、今まさに自分に起きているのだということの現在の状況を、把握したと同時に混乱した。

口から言葉が出てこなかった。

常日頃、この手の話はクラスのイケメンや、女子に人気な友達から伝え聞く程度で、自分で特に秀でた身体的、能力的特長も無い、

と、こういったことに関して半ばあきらめ気味に自覚していたアキヒコは、自分とは無縁などこか現実味のない出来事、そんな感覚で毎回幾人かの友人の中で聞き役となっていただけだった。
浮いた話というものは、なんとなく学校内でも一部の特権階級的な人たちのモノのように感じていたし、少々の憧れも抱きつつもあったが、難しい多感な時期の気恥ずかしさからか、無意識に、時には意識的に女性というものを避けていたし、クラスの女子と積極的に関わりを持とうというタイプでは無かった。
多少の取り留めの無い会話はしても、同学年の異性と腹を割って本音で会話をしたという経験はない。
そんなアキヒコが、この＜告白＞というイベントで、饒舌に会話ができるはずがない。
互いに言葉を発せぬまま、数秒間、時が止まったように感じた。
しだいに、最初はこちらの目をまっすぐ見ていたように思えた少女の目線も、どことなく伏し目がちになり、チワワを思わせる様なうるんだ瞳のまま、今度は夕日のせいではなく確実に顔全体を紅潮させうつむいていた。
こういった状況に遭遇したら何を言っていいのか、適した言葉はなんなのか。日常の雑多なことに追われ、体は大人に近づいてはいても、まだ世の中を自分中心で見がちな思春期高校2年生の少年の頭の中の恋愛という引き出しは、中身どころか引き出しに取っ手がついてない位に、あまりにお粗末だった。
たぶんこの少女も感じてきているのであろうか、アキヒコは気まずさを覚えはじめた。
自分から何か声をかけたほうがいいのか、また適した言葉が浮かんでこない自分への焦燥、目の前の消え入りそうに儚げに見えるか細い少女の震える体躯を見つめているうちに、現状をもたらしているのは自分の不甲斐なさのせいなのではと若干の自責の念を感じつつ、自らも額に汗を浮かべていることに気がついた。
校内の端に位置し、ちょうど環状線を横に面している駐輪場内、

いつもはまったく気にならないが、おそらく法定速度を超えているであろう快調に走り抜ける車の音がやけに耳に入ってくるようだった。
「あの……」
それでも何か言わなくてはと思ったアキヒコが口を開いたその瞬間
「あなたが好きです！」
今度は最初よりもはっきりとした声だった。というより、最初と同じセリフだった。
この目の前の小さな《前髪の子》は目線をはずすことなくまっすぐな瞳でアキヒコを見据えていた。
友達同士での普段の会話でも、それほど目を見て話すことが少なかったアキヒコは、今までの人生を振り返ってもこれ以上無いと思えるほど自分をしっかりと見つめてくる眼に、えもいわれぬ程の力強さと魅力を感じた。
声をかけられてからずっと、焦燥と混乱に陥っていたアキヒコが、まっすぐな瞳に射られ、ここで初めて、自分の鼓動が早くなり、今まで知らなかった感情が胸から湧き上がってくるのを感じた。
「それは、えーと、僕に言ってるんだよね」
パチクリと音が聞こえてきそうなまばたきをした
「そうです、私はあなたが好きです！」
少し上ずったような声で《前髪の子》は答えた
「それは付き合ってくれ、ってことでいいのかな？」
「お、おね、おねがいしまひゅ！」
よく青春モノの映画やドラマで見る、甲子園球児が礼をする時のような元気さで手を差し出しながらお願いします！　と告白する時みたいに《前髪の子》はペコリとお辞儀したまま固まった。
アキヒコは自分に好意を寄せてくれている目の前の子の動きにどこか可愛らしさを感じた。
「か、顔をあげてよ」
頭を下げていた《前髪の子》は、思いのほか機敏に頭を上げ、な

ぜか背筋を伸ばして気をつけの姿勢になっていた。
自然と口元に笑みが浮かび、そして、もう返事は決まっていた。
「告白してくれてありがとう、こんな僕でよかったら、どうかよろしくお願いします。」
このセリフをやけに落ちついた声色で言えた自分にアキヒコは内心驚いた。
それと同時に目の前の子に目線を移すと、その子はどんぐり眼をクリクリとさせながら2、3秒固まったあと突然
「よかったよぉ、ありがとー」
ふえぇぇー　と泣きながら抱きついてきた。
アキヒコは目の前で女の子が泣く、という初めてのことにたじろいだ。そして手の触れるような距離で近づくと頭のテッペンが自分の肩より低い位置にあることに驚いた。
また突然、無防備に抱きついてきてくれたけれど、自分の制服が汗臭くないかなどと心の隅で気にしながらも、自分の手のやり場に困っていた。
「ちょ、ちょっと、泣かないでよ」
気の利いたセリフがまったく浮かんでこなかった
「だって、だってぇ」
まだ少し泣き止むには時間がかかりそうだった。というよりこういう時の女の子がいつ泣き止むのかアキヒコは知らなかった。
手のひらにじんわりと汗をかいているのもこの時はじめて気がついた。自分の制服の横腹付近で見えないように手をぬぐって、人生初の背の低い彼女の肩の上から背中にかけてそっと手を回した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7098s/

彼女がいるってこういうことか

2011年4月24日22時55分発行